

# 教務だより

2011年6月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## WIN - WINを求めて...

茗溪塾塾長 宇野 雅春

合格体験記が出てだいぶ経ちましたが、その中で、ちょっと異色だったのが学習院大学に合格したT君の『合格体験記』という名の反省文です。まず、書き出しが「合格できるとは全く思っていませんでした。」ということで、理由としては、「勉強嫌い」と「早寝早起き」が苦手であること、そして「上がり症」で「コミュニケーション能力の欠如」、つまり塾が提唱する「早く寝て、朝早くに勉強をする」と「WIN-WIN」からかけ離れていたということがあげられていました。私が、注目したのは、彼のコミュニケーションの悪戦苦闘です。まず第一に、塾の同学年のクラスの中で、自分から人にどう話しかけてよいかかわからないという壁にぶち当たります。そして、それは受験の最後まで克服されないまま続きました。「メンバーや先生の話している内容を聞いて笑う等はありましたが、自分から誰かに話しかけることのないまま高3に突入し、高3のはじめに誰かに話しかけようと思ったのですが、『1年間何も話しかけてこなかったのにいきなり話しかけてくるなんて...』と、相手に思われるのではないかと思うと怖くなって、結局今を迎えてしまいました。」こんな感じです。

ただ合宿の時には、「別なグループでまともに話せた。」と書いています。でも、クラスに帰ってくると「教室内のメンバーからは仲間として認識されていたかどうか分からない」という状況となり、それは最後まで続いてしまったようです。

こうした状況にあるということ自体が彼にはつらかったようで、「自分のようにはならないで」と呼びかけています。「もし、教室の中で誰とも話さないで独りであるような人がいたら、話しかけてみてください。ひょっとしたらその人は、私のように『他者にどのように話しかければよいか判らない』だけなのかもしれません。」

彼が言うには、「他人とかかわりたくないというひねくれた人間はいない。」ということ、そして「誰かに話しかけるという些細なことが、自分や同じような人にとっては実はものすごく『大きな事』なのだ」ということです。

「誰かと自然に話ができるということは本当に小さなことですが、その初めの一步は、人によってはかなり大きなことです。その一步を切り出せない人に話しかけることは、その人がみんなの輪の中に自然に入り込める手助けになります。」と彼は書いています。そして「皆の輪の中に入り込めず、孤独にいるという事の孤独感は何とも言いようの無いもの...。」とそのつらさを述べています。

WIN-WIN を作る上で、人間関係の最初での躓きが、大きな足かせになります。そして、それは受験勉強に大きな影響を与えます。でも、T君は自分でそのことに気づきました。これはたぶん克服の一步です。合格体験記を書いたことで、彼の今後の行動方針は決まっているように思います。彼がおそらく現在直面している大学生活こそが、この自分から人に関わる必要を多く持っているからです。彼の健闘を祈りたい気持ちです。

T君のみならず、私の経験の中でも、決して自分から話しかけないわけでもないのに、全く関心をもたれなかったり、過度に遠慮されたりしているうちに、周りの人とどう接していいのかわからなくなることがあります。

最後の最後まで打ち解けられない状況は、誰かが仕組んで起こることではありません。思い切って話しかけられない自分に最も大きい原因がありつつ、どうにもならないということがあるのです。知らない集団に突然入ったとき、どんな人でもT君と同じ孤独感に悩まされる可能性はあるということです。人が人に無関心になる競争の世界ではありがちなことです。だからこそ、受験勉強にWIN-WINは必要です。頑張り続けていくために、人とのつながりこそが大きな支えになるからです。T君は、受験勉強を孤独に終えながら、その大切さに気がついたと言えないでしょうか？指導する塾の責務も思わずにはいられませんが、受験勉強が必要とするコミュニケーション能力は、たぶん社会に出てからも、ずっと必要なことだと思います。6月のテーマはWIN-WINです。クラスの人とのつながりについて今一度考えてみてはどうでしょうか？